PDF Compressor Free Version

ふるさとの歴史 こぼれ話 Vol.36

河渡輪中「水とのたたかいの歴史」①

岐阜市の西北部・長良川右岸最南端に「河渡輪中」があります。この輪中は、東に流れる長良川とその支流伊自良川、西及び南に流れる糸貫川に囲まれています。今はそれぞれの地区の行政区は岐阜市・瑞穂市・北方町と別々になっていますが、どんな歩みをして来たのでしょうか？

1. 河渡輪中の形成 江戸期

長良川・長良古川・伊自良川等の土砂が川沿いに微高地（自然堤防）をつくり、人々は集落をつくりました。それが下尻毛や寺田、河渡です。また根尾川（註1）が合流点に土砂を積んだ微高地が曽我屋です。

他方、糸貫川左岸に土砂を堆積した微高地が北方、高屋、馬場、生津などです。

そして長良古川沿いの微高地と糸貫川沿いの微高地に挟まれた低湿地は、ガマ（湧き水）も噴き池をつくり、席田用水の残り水と一緒に日詰川や天王川として流れています。

濃尾平野は、毎年のように洪水に見舞われていました。1700年代、特に宝暦治水（薩摩藩のお手伝い普請）以後は、長良川上流部・伊自良川・糸貫川など河渡輪中を取り囲む河川のあちこちで、堤防切れなどの被害が多くなりました。これは、下流の多くの輪中で築堤・堤防改修が進められ、さらに宝暦治水で大榑川の洗堰ができた結果、まだ輪中堤などが整備されていなかった上流の村々が被害を受けるようになったからと考えられます。

この地方の人々は、輪中堤を築き上流からの水や逆流を防ぐ事、滞留させないように排水する事によって、家や田畑を守ろうとしました。

2. 曽我屋横小堤の築堤 江戸期

出水の度に、長良川や長良古川・伊自良川などの水が板屋川・根尾川に逆流したり溢れたりして、曽我屋や寺田・高屋・河渡などの地域を直撃しました。上流部の本巣・北方・尻毛等に降った雨も、これらの地域に流れてきました。そのため曽我屋村の北限に東西に堤を築き、北部から浸水しないようにするため考えられたのが「曽我屋横小堤」でした。

曽我屋小堤と石標

宝暦2年（1752）本田代官所に願い出て以来、紆余曲折を経てやっと明和元年（1764）に、長さ272間半（約490m）・高さ4尺（約120㎝）・馬踏（註2）4尺・敷2間の小堤が完成しました。さらに天明6年（1786）長さ215間（約390m）の築き足しが行われました。

この間、横小堤が築かれると支障が出てくる上流部の川部村・尻毛村などの反対や敷地提供補償など、様々な問題もありました。

完成後も、天明7年を初めとして、文化、文政、天保、弘化、嘉永、安政年間など、上流部と下流部の村間の紛争は絶え間なかったようです。互いに実力行使で争ったことも記録されています。そしてその度ごとに、堤防の高さ、馬踏の幅、修繕や費用の負担、修繕時の立ち会い、雑木の切り払い、水除普請手当の金額と配分など細かい約束を、陣屋の調停・命令などによって確認しあったりしました。

3. 天王川筋の排水と糸貫川伏越（註3） 工事 江戸期～明治期

長良川や糸貫川の川床が年々高くなるにつれ、河渡輪中の中を流れる日詰川・天王川は水捌けが悪く、毎年夏になると水害がおきました。この輪中の南で糸貫川が長良川に流れ込む中、輪中の中の天王川等の排水が困難なのは当然でした。

そこで、人々は天王川の水を糸貫川底を潜らせて下流の穂積方面まで運び、落差をつけて長良川へ排水しようとしました。

現在の天王川排水路

しかし、この計画には下の只越村や別府村、上穂積村、下穂積村（現・瑞穂市）などが反対しました。

交渉や協議の結果、慶応元年（1865）只越村とは「堤永続手当として河渡輪中から只越村の堤を増強し、潰れ地の弁米（弁償する米）や掟米（取り決めの米）を毎年納める」と約定し、牛牧輪中などの村々とは「別府村へ75両、上穂積村へ75両、下穂積村へ70両を差し出す」などの示談がまとまりました。

翌年に竣工しましたが、天王川の糸貫川伏越はとても大変な大工事でした。先ず糸貫川を堰き止め、糸貫川の川底を掘り割って圦樋（註4）を伏せ込み、天王川を糸貫川底を流さねばならず、また新水路を掘削したり、旧川筋を浚えたり…。

しかし長良川の河床に土砂が積もって伏越樋の効果も少なく、あまり水は長良川へ落ちなかったようです。

明治24年（1891）の濃尾地震は樋管・橋を破壊し、翌年「さらに下流へ水路を延伸して穂積村で吐かせよう」とする計画が知事に願い出され明治29年に完工しました。

更に明治33年木樋管の一部が陥落し、北部30間を人造石に改造。糸貫川川底はコンクリート工法によって竣工、明治43年に一切を終えました。

明治35年天王川伏越樋工事

4. 明治以後も続く水害

明治になっても、人々は毎年のように水害で苦しめられました。明治元年（1868）、7年、10年、11年、14年、17年、18年、21年、26年、28年、そして29年7月と9月、24年には濃尾大地震もありました。

特に明治29年の水害は7月と9月の2回に及び、その被害は大変なものでした。寺田・曽我屋・一日市場・河渡・生津など、輪中内の堤防はあちこちで切れ、学校の校舎や多くの人家が流されたり、多くの家が天井や屋根まで水がついたりしました。

次号（春号）に続く。

河渡輪中・明治時代の主な水害のようす

明治元年（1868）5月	河渡村は潰家41軒の被害
7年（1874）	糸貫川が出水し生津村で堤防20間破堤。
10年（1877）10月	寺田村学校地先にて32間切入る。学校流失。
17年（1884）7月	一日市場内大ヶ島により30間5尺切入り。
25年（1892）6月	長良川出水で河渡橋40間流失。
26年（1893）8月	河渡村で長良川鉄橋南が決壊し、河渡輪中が湖となる。
28年（1895）7月	長良川通り河渡村、長良古川筋一日市場村で破堤。
29年（1896）7月	3ヶ所で決壊し、小学校校舎1棟・人家31戸が流失し、老女1人が溺死。寺田村で堤の切れ所2ケ所100間。河渡村で切れ所5ケ所405間。曽我屋村で切れ所70間。掛廻堤の切れ所50間。一日市場村で切れ所80間と267間。河渡・生津の組合堤も30間の切れ所。
29年（1896）9月	長良川は一日市場村・曽我屋村で切れた。下曽我屋村では天井まで水が浸き、家も流れた。河渡村では屋根まで水没。

『岐阜市合渡の歴史』『岐阜県治水史　下巻』より作成

河渡の決壊現場・明治29年

（註1）1530年の洪水で流路を変えてできた現在の根尾川（揖斐川の支流）とは別に、以前の流路である糸貫川と根尾川が長良川の支流として残っています。

（註2）馬踏（バフミ）は、堤防の上を人馬が通行するように平らになった部分。

（註3）伏越とは水路工事における工法の一つ。排水路が河川と交差する場合、その河川の川底を潜らせて低い土地へ流すための水路や管のこと。

（註4）圦樋とは水路の入口や吐き口にある樋。

○この文章は、『岐阜県治水史』や『岐阜市合渡の歴史』等をもとに、後藤征夫がまとめました。